

## 島根県吉賀町旧柿木村の里山利用

### 1. 地域の概況

島根県旧柿木村は、山口県と接する県最西部にある。日本海にそそぐ高津川流域の中国山地に属する山村(面積 13,737ha、内 94%森林)である。農耕地は村の 2%に止まるため、山麓をシイタケ、クリ、ワサビ、ミツマタ、茶の栽培、和牛の放牧等に利用した。他に木炭、コンニャク、養蜂、竹材加工、ヤマメ養殖、自然薯、イノシシ狩猟やマムシ採取など山の幸、川の幸に恵まれていた。



図 島根県吉賀町旧柿木村

### 2. 多彩な里山の幸

とりわけ品質の高さと生産量を誇ったのがシイタケ、ワサビ、クリである。1970年代には2億円の生産額を上げたのが乾シイタケで、木炭生産の後退から、クヌギ、カシなどのホタギ原木に恵まれるとともに、村内での技術研修にも力をいれていた。ワサビは関西市場で高い評価を得て、溪流沿いの水田ワサビばかりか、畑ワサビも栽培されている。シイタケ、ワサビと同様に等級区分など徹底する必要があるのがクリの実の選別である。1980年ごろには同村の主要な作物にクリが加わっている。



出典：柿木村大井谷の棚田

[http://www.vill.kakinoki.shimane.jp/dorecome\\_schoole/kids/vol001/page01/page01\\_list.htm](http://www.vill.kakinoki.shimane.jp/dorecome_schoole/kids/vol001/page01/page01_list.htm)

1980年の過疎化対策としての「定住構想推進」の調査では、スギ造林地にミツマタを間作し、ミツマタが黄葉しているのを現地で確認している。このように1970、80年代までの柿木村の主要作物群は、スギ林をホタ場とするシイタケ栽培、上木広葉樹とワサビ田や畑、そしてクリとその下でのミヨウガ栽培など、場合によっては土地所有と経営を異にする複合的な営みが、地元農民の間で行われた成果でもある。里山では複合的な利用のため、適度な林木密度の管理となって、太陽光線が木漏れ日として林床に及び、それが二次的自然での生物多様性にも寄与していた。

### 3. 有機農業や環境教育による新たなネットワークの開発

品質管理に発揮された里山の多様な作物体系は、その後の過疎化、高齢化の進行とともに大幅に後退する。今日里山再生の活動は有機農業をテコする「柿木村の有機農業の原点は『自給自足』」や子供たちへの環境教育のために「山の力」を実感させる活動などのプログラムが、自治体役場と都市のNPO法人などによって進行している。

出典：林野庁.1981.個別課題調査報告書(地方定住促進のための「緑のコンビナート構想」) 有機農業小さな村の挑戦 ([http://www.town.yoshika.lg.jp/kakinoki/yuki\\_nogyo/story/vol001/p-1.htm#3](http://www.town.yoshika.lg.jp/kakinoki/yuki_nogyo/story/vol001/p-1.htm#3)).